巻頭言

1999年4月に開設された比較文化学部の第1号紀要をここに発刊できることになったのは、まことに喜ばしい限りである。

多摩キャンパスの先輩学部の社会情報学部と同様に、人間関係学部も、比較文化学部も、共に学際的学部であることは、その名称からも明らかであろう。比較文化学部の教育と研究は、日本文化に対する深い理解をもとにして行われる。自国の文化の根を深く探ることは、不思議なことに、他国との絆や親交を深めることにつながっていく。日本文化との交流を追及し、比較研究を行う文化圏は、アジア、アメリカ、ヨーロッパである。「比較」という手法が、自国と他国の文化の特質を明らかにするのにきわめて有効である。

学際的である学部では、今まで一つの学部や学問領域の中に硬く閉ざされていた研究テーマを、複数の視点から、柔軟にかつ有機的にとらえ直すことができる。私達の学部の「文化」とは、文学と芸術だけではなく、広く思想、風土、宗教、歴史、政治経済などをも包含する。たとえば、文学と絵画などの視覚的芸術との密接なかかわり、思想とそれを生み出す風土や歴史との関係などに対する柔軟なアプローチなどが可能となる。異なった文化の出会い、そこに起こる衝突や刺激、そこから生ずる文化変容の跡をたどるのも、心躍る知的冒険である。

また、目の前にある社会問題や政治現象も、歴史をさかのぼると、言語、文化、宗教、民族がその根元に複雑に絡み合っている。それを見抜く鋭い洞察力を養うというのも、比較文化学部の目的とするところである。

このような展望をもった学部であるから、教員の専攻分野も、きわめてヴァラエティに富んでいる。この紀要は、各教員の研究発表の場であると共に、比較文化学部の教育と研究の方向を指し示すものともなることを期待している。様々な分野の教員が一つの学部に集まっていることは大きな強味である。将来、共通のテーマで特集号を出すような方向に発展するのを希望している。

緑豊かな多摩丘陵にできた私達のキャンパスを、「希望の丘」とよびたいと中川学長は言われた。比較文化学部は、この丘に始まった短期大学部3学科の伝統を受け継ぎ、更に、清新、潑剌とした知の学統を生み出す学部でありたいと願ってやまない。

2000年3月

斉　藤　恵　子